

実践報告 (Report)

高校「現代の国語」における語彙指導の実践と課題

—生きて働く「知識・技能」としての語彙をどう育てるか—

How to build up vocabulary for knowledge and skills which can be utilized

田中洋美*

TANAKA Hiromi*

摘 要

「高等学校学習指導要領(平成三十年告示)」の語彙指導の重点は、実社会や生涯にわたる社会生活で使える語句の量を増すとともにその質を高めることだ。

本稿では高等学校国語科「現代の国語」(読むこと)の実践事例を取り上げ、初年次における中学校・高等学校間の系統的な語彙指導の手立てについて考察したい。具体的には内田樹著『『身銭』を切るコミュニケーション』(東京書籍『現代の国語』, 現国703)を用い、「身銭を切る」という表現を軸に主張と具体例を区別しながら要約を作成した(4時間設定)。辞書上の意味や既知の知識を手掛かりに語彙を広げ、文脈上の意味を理解し自分の言葉で捉えなおす過程を要旨の把握に役立てた。生徒自身が語句の理解、習得、活用の過程を経験的に積み重ねる単元構想と系統的な指導計画が今後の課題である。

キーワード : 現代の国語, 語彙指導, 読むこと

Key words : Contemporary Japanese Language, Teaching Vocabulary, Reading

1. 課題の所在

1.1 「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」の改訂の要点

『高等学校指導要領(平成30年告示)解説 国語編』(以下、『高校解説』)の教科の目標では、「生涯にわたる社会生活」に向け、生きて働く「知識・技能」としての語彙の習得を目指している(p. 21)。

「[知識及び技能](1)言葉の特徴や使い方に関する事項」には、必修教科目について次の指導事項が備わる(『高校解説』pp. 326-327。下線は筆者が付した)。

「現代の国語」

エ 実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

「言語文化」

ウ 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

両科目とも「語句の量を増し」「理解し(理解を深め)」「話や文章の中で使うことを通して」(「言語文化」は「話すこと・

聞くこと」の領域の設定がないため「文章」のみ)「語感を磨き語彙を豊かにする」という構造である。ここから語彙を豊かにする要点は、科目の目標に応じた語句の量を増すことと、言語活動を通して習得すること、語感を磨く過程を設定することの3点といえる。この3点は中学校の指導事項とも共通するため、校種間の系統的な指導を考える上でも重要である。

これらの語彙指導の基本構造を踏まえたうえで、「現代の国語」では「実社会に必要な語彙」、「言語文化」では「生涯にわたる社会生活に必要な語彙」の獲得を目指すことになる。

1.2 日本語学研究成果から授業改善を考える

今回の改訂の特徴の一つに「高等学校学習指導要領(平成22年6月告示)」に比べて指導事項の記述が「何を」「どのように」指導するのか具体的に設定されたことが挙げられる。鈴木一史(2019)は、語彙の指導内容として「量と質という観点、理解語彙と使用語彙という観点は、学習者の認識内面に沿った具体的な言語諸相を提示」したものであることを指摘する。加えて、「発達段階も踏まえ系統化された学習のために具体的な文言が示されている」ことから、各学年の指導の充実だけでなく継続的な指導が可能になる点にも注目している。

また、指導事項と関連の深い日本語学の研究成果をつなぐ

* 相山女学園高等学校
2022年11月8日受付

指導の提案も出ている（田中牧郎 2018a, 2018b, 2019）。田中牧郎（2018a）は「中学校学習指導要領」を例に次のような対応を示している（「」内が指導事項の内容，右側が対応する日本語学の語彙研究の領域）。

- ・「類義語と対義語，同音異義語」→語彙体系の研究
- ・「辞書的な意味と文脈上の意味との関係」「多義的な意味を表す語句など」→語の意味の研究
- ・「慣用句や四字熟語など」→語構成の研究
- ・「和語，漢語，外来語などを使い分ける」→語種の研究

加えて3学年を通じて書かれている「語句の量を増す」とことは基本語彙の研究と関連し、「語感を磨き語彙を豊かにする」ことは語彙教育の総合目標であるとされる（田中牧郎 2018a）。こうしてみると教科書のコラムなどで取り上げられてきた項目はいずれも背景に専門領域があることが再確認できる。それぞれの研究領域の新しい知見が教室にもたらされることで，言葉に対する興味・関心をさらに引き出せるのではないだろうか。

また，田中牧郎（2019）は言語活動の中で語彙に関する指導を行うことを想定し，類義語群に対するコロケーション分析の活用を有効な手段の一つとして紹介している。国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』，コンコーダンサー『中納言』の活用など具体的な学習場面を想起しやすい提案である。

しかし，コーパスなどは日本語学を専門としない教員にとって限られた単位時間数では，にわかに授業計画に取り入れることは難しいかもしれない。筆者もその一人だが，コーパスの分析結果を踏まえた国語辞書（たとえば『現代国語例解辞典（第五版）』小学館など）なら手軽に利用できる。他の辞書と引き比べることで言葉の意味や由来だけでなく，現代社会で「実際，どのように使われているか」という点にも目を配りたい。

今回の単元では『分類語彙表（増補改訂版）』を使用し，類義語の関係を考えることに役立てた。インターネット検索では「よく似た表現」がでてきても並列にしか表示されない。やはり，その差異を体系的に理解するには類義語辞典や『分類語彙表（増補改訂版）』等と照らす必要がある。だが，生徒が予習などで用いる参考資料については年間を通じて適宜聞き取りを行っているが，インターネットの辞書サイトの利用が多い状況だ。生徒が自分で調べる場面で何が活用できるのかという課題も併せて考えていきたい。

1.3 「現代社会」で必要な「語彙力」とは何か

また，言語運用能力の未熟さや語彙不足については社会的な関心も高い。書店でも「語彙力」に関する書籍が多く並ぶ。日本語学のみならずビジネス文書の書き方や「大人の伝え方」

など実社会で生きる語彙力に関する著述が多い石黒圭（2016）は，「語彙力」を「語彙力＝語彙の量（豊富な語彙知識）×語彙の質（精度の高い語運用）」と定義する。豊富な実例とすぐに使える提案が多いが，その背景には文字に依存するコミュニケーションが増える中，過剰な表現が好んで使われる状況に対する危機意識がある。「読者の心に届く言葉にするためのコツ」は，「文脈に合った等身大の言葉選びをすること」（石黒（2016），p. 240）に尽きると述べる。

教室で「等身大」の言葉を磨くためには，「文脈」の的確な理解と自分の考えを「言い当てる」場面（自分の考えを表す言葉を探す，試しに話して反応を窺う等）の設定が役立つと考える。いずれも「等身大」の言葉を探る過程では，試行錯誤しながら粘り強く自分の言葉と向き合う経験を積み重ねることが大切なのだ。

1.4 中学校・高等学校間の系統的な指導の手立て

以上をふまえ，高校初年次の語彙指導の具体的な手立て，特に中学からの系統的な指導の具体を考えたい。

まず，筆者の勤務校（以下，本校）は中高一貫校であるが，高校入学時に学年の半数が併設中学校以外から入学する。併設中学校での取り組みは日常的に情報収集に努めることができるが，その他の学校については授業や小テストなどで生徒の実態を通して学習活動の経験や習熟度を確認していくことになる。加えて語彙の質と量については生徒間の個人差が大きいため¹⁾，まずは一斉に指導し，その後，個別に必要な支援を講じることが適当であると考え。

したがって，授業を構想する上でまず全国の中学校・高等学校の指導の共通項である「学習指導要領」の「教科の目標，各学年の目標及び内容の系統表」（『高校解説』『付録4』）を活用しながら指導の方向性を探ることを提案したい。校種間の系統的な指導を構想する際の要点として，次に3点挙げる。

- ① その単元で取り上げる指導事項を選び，理解・習得・活用させる手立てを考える。
- ② 「教科の目標，各学年の目標及び内容の系統表」（『高校解説』『付録4』）を小・中・高を結ぶ見取り図として関係する指導事項の洗い出しに活用する。
- ③ ①，②を踏まえ，既習事項を確実に習得し，活用できるかを確認する場面を設定する。

高校では，指導事項の内容に対する理解を深めるとともに，実社会や生涯にわたる社会生活を見据え「言葉で生き抜く」生徒の姿を具体的に捉えることが指導の起点となる。たとえば，「言葉を定義して使うこと」などは伝え合いや文章理解の基盤となるが，なかなか定着しない。これは「語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して話や文章の中で使うこと」（中学校第1学年，知・技(1)ウ）で身に付けた力

が活用できる。教科書教材の読解だけでなく、他の言語活動においても、言葉の本来の意味を理解した上でその場で必要となる意味の範囲を互いに確認する例が考えられる。このように言語活動を構想する際、改めて語彙指導の視点で見つめることで「つなぐ」指導の課題が具体的に。「なぜ」「これを」「今ここで」指導するのか——指導の系統性と必然性を確認しながら進めていきたい。

2. 事例「現代の国語」

2.1 単元の概要

今回は、「現代の国語」（「読むこと」）の単元学習において慣用句を用いた表現の分析を内容の理解に役立てる事例を取り上げる。なお、指導案は本校1年（女子76名）を対象とし2022年4月20日～5月13日に実施した授業を基に再構成している。

単元：「語句や語彙の構造に注目して論理的文章の内容を捉え、要約しよう」

(1) 単元の目標

- ・実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すと同時に、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)エ
- ・文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(1)ア
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。「学びに向かう力、人間性等」

(2) 指導の概要

慣用句を用いた表現に注目し、論理的な文章の要旨の把握に役立てることを指導の中心とする。

なお、慣用句を取り上げる理由は3つある。第一に小学校、中学校、高校の全てに指導事項が配置され系統的な指導が構想できること、第二に語句や語彙の構成を考える機会になること、第三に語句の意味や表現の仕方の理解を通して内容の理解を深めることができることである。

(3) 本単元における言語活動

語句や語彙の構造についての理解を踏まえ、論理的文章の要旨を捉える活動

(関連：〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(2)ア)

(4) 単元の評価規準

- ・実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すと同時に、語句や語彙の構造や特色、用法及

び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。(知識・技能(1)エ)

- ・「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。(思考・判断・表現C(1)ア)
- ・論理的文章を要約することを通して、語句や語彙の構造を理解し、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、粘り強く要旨を把握する中で、自らの学習を調整しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

(5) 教材・教具

- ・主たる教材：内田樹『『身銭』を切るコミュニケーション』（東京書籍「現代の国語」（東書/現国703））
- ・補助教材（読み比べで用いる）
 - A 内田樹(2013)「コミュニケーション能力とは何か」(「内田樹の研究室」, 最終閲覧日2022年7月29日)
※関連：内田樹(2014)「基調論文 コミュニケーションの基本」(『土木学会誌』vol. 99)
 - B 内田樹(2014)「ふつうはしないことを、あえてする」(『街場の共同体論』「第6講 コミュニケーション能力とは何か」, pp. 163-168, 潮出版)
- ・端末(学習支援クラウドアプリケーション「ロイロノート」)

(6) 単元の流れ（全4時間）(表1) ※次頁参照

2.2 語彙指導の工夫

第1次 辞書的な意味と文脈上の意味との理解、語句の構造の理解

辞書的な意味を理解し、読解に役立てる指導である。具体的には以下の段階を踏んだ。

- ① 「分からない言葉」とどう向き合うか（語句の構造に着目して量を増す）。
- ② 題から問いを設定し、主張と具体例を区別しながら要旨を捉える。

ここでは、中学校第1学年（知・技(1)ウ）にある「語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注目して語や文章の中で使うことを通して」が定着しているか確認しながら進めた。

まず、題の解釈を行い、次に主張と具体例を区別しながら要点をまとめる流れである。題『『身銭』を切るコミュニケーション』に対し、疑問を出す。

その際、おおよそ2種類の疑問が出る。①「身銭を切る」の意味、②「『身銭』を切る」コミュニケーションとはどのようなものかの2点だ。①の慣用句については、予習の段階で「理解語彙」「使用語彙」の区別を意識させながら意味調べを課した。具体的にはその語が自分にとって説明できるぐらい理解できているか(○)、また使いこなせているか(◎)、あるいは初見で意味もあやふやか、もしくは意味が全くわか

表1 指導と評価の計画

次(時)	学習活動	指導上の留意点	評価規準, 評価方法
1次 (1・2時)	<p>◎慣用句を用いた題を取り上げ, 語句や語彙の構造について理解する</p> <p>○単元の目標を確認し, 学習の見通しをもつ。</p> <p>○導入</p> <p>・「実社会」で使える言葉が増える過程について考える。</p> <p>・題名(「『身銭』を切るコミュニケーション」)を例に語句や語彙の構造について理解する。</p> <p>・題名を用い, 本文の要旨を掴むための問いを作る。</p> <p>○主張と具体例を区別しながら各段落の要点をまとめ, 要旨を捉える。</p> <p>○ふりかえり</p>	<p>・予習として漢字の読み書き, 重要語句の意味調べ, 意味段落分けを行う。</p> <p>・K・W・Lの観点(#1)を利用し, 調べる内容を明確にする(今回は「意味が分からない, 曖昧だ」というものに△を付ける作業)。</p> <p>・同様に本文中の語句で意味が分からない, もしくは曖昧なものは, 意味を確認させる。</p>	<p>・語句の構造に注目し, 読解に必要な語句の量を増している(知・技)。</p> <p>・記述の確認</p>
2次 (3時)	<p>◎読んだ内容や自分の考えを試行錯誤しながら, 言い当てるまでの過程で語彙の質の向上を図る。</p> <p>○慣用句と話題を示す語句の組み合わせがもたらす表現の効果を, 内容と関連させて考える。</p> <p>1. 本文の内容を踏まえた「コミュニケーション不調」の事例を挙げ, その不調を改善する提案を考え, 慣用句や四字熟語を用いて表現し, 交流する(「資料」参照)。</p> <p>2. 主たる教材と筆者が同じ具体例を用いた作品(題名が異なるもの)を読み比べる。</p> <p>3. 1, 2を踏まえ, 主たる教材の題名の表現の仕方の工夫および内容の関わりについて評価する。</p> <p>○ふりかえり</p>	<p>・身近な例で自分の考えを慣用句等で置き換える活動を通して, 文字による伝達は意図を明確に表現するだけではなく, 相手に理解されるものであるかの確かめが必要であることを理解させたい。</p> <p>・この経験を踏まえ, 改めて主たる教材の題の表現の仕方の工夫や内容との関わりについて考えさせる。</p>	<p>・語句の構造に注目し, 読解に必要な語句の量を増している(知・技)。</p> <p>・記述の点検</p>
3次 (4時)	<p>○1次・2次の学習活動を踏まえ, 要旨を見直し, 要約を作成する。生徒相互で点検する。</p> <p>○学習全体のふりかえり</p>		<p>・文章の種類を踏まえて, 内容や構成, 論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え, 要旨や要点を把握している(思, 判, 表等)。</p> <p>・記述の分析</p> <p>・論理的文章を要約することを通して, 語句や語彙の構造を理解し, 内容や構成, 論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え, 粘り強く要旨を把握する中で, 自らの学習を調整しようとしている(主)。</p> <p>・行動の観察, 記述の分析</p>

らないのか(△)を直感的に判断し, 語の上に印をつけさせている。本校の探究的な学習の課題づくりでも活用するKWL(Know, Want, Learn)の発想で調べる際, 自分がどのような情報を求めているかを明確に意識させることができる。今回, 予習で調べた言葉の中でも「身銭を切る」は説明できる生徒は6.8%と大変少ないうえに「はじめてみた, 意味が分からない」とする生徒も20.5%と多かった。慣用句でも「肩をすくめる」は6割が説明できる。新聞の大見出しにも「身銭切る命の相談員」(『中日新聞』2022年7月19日朝刊, 1面)と使われる表現だが, 生徒にとって「身銭」という表現が聞きなれないことが理解されない要因か。

一方, 類義表現で「自腹を切る」「懐を痛める」が出ると「そゆこと!」と一気に知っている雰囲気になる。ここで語句の構成に注目させる。「●●を切る」「懐を○○」という作りから同じ支払いに関する他の表現とどのように違うのか考える手立てが得られる。辞書の説明「自分の金で支払う」(『広辞苑』第7版), 「本来自分が出す筋合いではない金を, 自分の金で支払う」(『明鏡国語辞典』)などと組み合わせて考えると,

「本来自分が行う筋合いではないもののあえて行う様子」などと推測できる。その後に「コミュニケーション」が続くのでどのようなコミュニケーションを指すのかなど疑問点を整理し, 本文の解釈に進んだ。

また, 読解の指導上での躓きに対し, 辞書的な意味を文脈上の意味に生かすことで修正できた例もある。本文は「スーパーのレジでいきなり店員に聞かれたことがわからない。実は郵便番号を尋ねていた」というエピソードから始まる。筆者がカウンター越しに身を乗り出し一言一言尋ねたところ, 店員も一言一言区切って「郵便番号は何ですか?」と質問内容を教えてくれたというやり取りが紹介される。後半の段落でこのやり取りこそ「『身銭』を切ったコミュニケーション」と書かれている。

初読の段階では「身銭」にあたるものは「身を乗り出すこと」であり, 「一言一言区切って発音したこと」, 「手間暇かけたこと」と断片的な理解である。そこで第1次で取り上げた「身銭を切る」の意味を再度確認するとほかならぬ「自分が」問題解決のため行動を起こしていたことに気づく。先に

出た断片的な行動の目的は何かに焦点をあてて再度読み直すと、文脈上の意味「身銭」は「両者にとって誤解の余地なくコミュニケーションが可能なレベルを探り当て再度スタートするための努力、手間暇のこと」、そのためにまず自分から行動を起こすことと整理できる。

第2次 慣用句を用いた表現と内容の関係を考える指導

書き手の発想をつかむため、読み手自身が慣用句を用いた表現を試す活動である。読んだ内容や自分の考えを試行錯誤しながら言い当てるまでの過程で語彙の質の向上を図る。ここでは次の段階を踏んで要旨や要約を見直す視点を養った。

- ① 「コミュニケーション不調」の改善策を、慣用句を用いて表現する。
- ② 同じ著者が同じ具体例を用いた複数の作品と題の関係を比較し、主たる教材の表現の仕方の工夫を評価する。

ここでは、中学校第3学年（知・技(1)イ）にある「慣用句や四字熟語などについて理解を深め」ているかを確認しながら進める。

①の課題で用いた「コミュニケーション不調」の4事例は文化庁「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」を参考にして教員が作成した（資料1）。

資料1に発問とふりかえり時に使用した資料を掲載する。生徒の作品はクラウド上に提出させ、期間内は何度でも練り直し再提出できるようにした。特に上記の②「同じ著者が同じ具体例を用いた複数の作品と題の関係」と比較したのちに修正した生徒が多く出た。その際の生徒の気づきを抄出すると、「対象が違うから」（相手意識の違い）、「論文と雑誌の文との違い」、「単行本にしたから」（再度見直して変えたのでは?）、「『身銭』がでてこない……」、「『ふつうはしないこと』と言い換えられている」、「『身銭』を切る」が『コミュニケーション能力』に置き換えられている」と「身銭」が不在であることに気づく。

同じ著者が同じ具体例を用いても主張の強調点が異なると「身銭を切る」コミュニケーションとは言わない。では、本教材でこの題を冠した理由はなんだろう？という問いかけをし、本文の要旨の確認、要約作成の手立てとした²⁾。

では、この展開が生徒自身の語彙を増やしたり、磨いたりする機会になったのだろうか。これを考えるため、次に第2次のふりかえり（アンケート方式）を抄出する。

第2次の「ふりかえり」より

- 問1 「題」（『身銭』を切るコミュニケーション）の付け方やクラスメイトの「提案」を見た後、自分の「提案」を見直しましたか？ 次から1つ選びましょう。（回答数72，回答方法：4つの選択肢から1つ選ぶ）

- ・「自分の作品を見直し、四字熟語・慣用句を差し替えた」 31.2%
- ・「自分の作品を見直し、説明部分を加筆修正した」 37.2%
- ・「自分の作品を見直したが、特に加筆修正はしなかった」 18.1%
- ・「自分の作品を改めて見直すことはしなかった」 2.8%
- ・「その他」 9.7%

○考察

併せて主たる教材の「題」やクラスメイトの「提案」の表現の仕方の工夫で気づいたことを記述させた。これは、他の作品から得た気づきを言語化することと自分の学習に生かすことを目的としている。主たる教材の題やクラスメイトの作品を見ることで、自分の作品を見直した生徒が86.5%いたことから、概ねこの展開で見直すきっかけが得られたといえる。

問2 出典について

今回、四字熟語や慣用句を選ぶ際、どんな資料を使いましたか？（回答数66，回答方法：自由記述）

- ・インターネット 54.5%
- ・辞書類（紙媒体） 34.9%
- ・電子辞書 6.1%
- ・知っている語彙から選んだ 4.5%

○考察

「インターネット」の内訳は「ジャパナレッジ」、「goo辞書」、「コトバンク」、「四字熟語データバンク」、「慣用句辞典」、「yahoo知恵袋」、論文他である。本校ではオンライン百科事典「ジャパナレッジ」を端末から使用させている。その点からも5割以上がインターネットを利用し検索していた。ただし、インターネットで検索し上位に挙がったものや「yahoo知恵袋」の回答など、情報の信頼性が確認できない出典については注意が必要である。

一方、情報の吟味の過程で妥当性と信頼性を意識して進めることができた生徒もいた（下線は筆者が付した）。

生徒A

googleと電子辞書を使いました。まず「準備万端」と調べ、同義語であるという「用意万端」という言葉にたどり着きました。その後、「用意万端」が本当に正しいのか電子辞書で確認しました。

生徒B

「四字熟語 Q&A」「goo辞書」の2つのサイトを使いました。

生徒Aは検索の過程を記している。「準備万端」と「用意万端」のいずれが「正しい」のかを最終的に『広辞苑』を掲載する電子辞書で確認している。生徒Bはどのような目的で2つのサイトを使用したのかを明確にできるとよい（見当たらなかったのか、説明が不十分だったのか、正しい情報が確認するためなのか等いろいろな場合が考えられる）。

複数の情報源の照合としては「周囲の人」の使用語彙を活用するという方法も見られた。たとえば、自分の表現したい内容を表す四字熟語や慣用句を家族に言い当ててもらい、その適否を辞書で引くなど周囲の人と関わりながら考えた生徒も複数いる。人との関わりの中で実際に使い方を確かめながら選ぶ過程が期せずして語彙を増やすきっかけにもなったと思われる。

なお、今回、調べる過程が家庭学習であったため家庭にある紙媒体の辞書（四字熟語辞典、故事ことわざ辞典他）も3割以上活用している。

資料1 第2次「() ×コミュニケーション」の発問と事後のふりかえり

1. 発問編（以下、課題文）

提案する： () ×コミュニケーション

現代の社会は「分かり合うため」にはさまざまな課題を乗り越える必要があります。①次のA～Dのいずれかを選び、「コミュニケーション不調」を改善、解決する方法を考えましょう。（事例は文化庁（2018）「分かり合うためのコミュニケーション（報告）」を参考にしました。）

事例A

クラスの友だちと文化祭の企画について SNS やチャットでは割と話しやすいのに、対面では自分の意見が十分に言えない。班の企画提案のめ切りが明日なのでどうしよう。

事例B

部活の先輩が「計画が煮詰まった！」と言ったので「いきづまったんですね」と言ったところ、「は？」と返された。よく見聞きする表現なのにこまったなあ。

事例C

相手に配慮したつもりで「大丈夫？」といったのかえって気分を悪くしたみたい。こんな誤解はどうすればいいのか。

事例D

友だちとは割と気軽に話すことが多いけれど「話が難しい」「話が飛ぶ」といわれちゃった。どうすれば分かり合えるのかなあ。

○進め方

STEP 1 事例A～Dから1つ選ぶ ()

STEP 2 具体例を挙げる→問題はどこにあるか？ 改善する手がかりは？

「両者」（話し手（書き手）、聞き手（読み手））の双方から考えてみよう

STEP 3 改善方法、解決策を一文でまとめる

STEP 4 改善方法、解決策の中心となる部分を慣用句や四字熟語を用いて表現する

() コミュニケーション
その心は（理由、説明などを簡潔に書く）

[ふりかえり] 改善方法や解決策を的確に表すためにどんな工夫をしましたか（困ったところ、次に生かしたいことをまとめてもよい）

2. 事後ふりかえり編

生徒の作品、振り返りはクラウド上に提出させ、画面共有で紹介した。

その際に行った解説を以下にまとめる。

(1) 問題点はどこかな？

- ・教科書の本文では、レジで、初対面同士が話し合う場面が取り上げられていました。
- ・今回の課題はいずれも学校や友だちなど親しい間柄が話し合う場面です。身近な存在だからこそ踏み込んで言えること、言えないこともでてきますね。そこで人間関係を円滑に保ちながら自分の意見を伝え合う工夫や相手の意図を確かめる工夫を考えてみましょう。
- ・今回は本文にならって「話し手」「聞き手」など双方が努力して解決する立場をとります。どの立場で提案するかで内容が異なるので注意しましょう。

(2) 事例別 生徒が取り上げた話題と考えるポイント

事例A 対面状況では自分の意見が言いにくい例

- ・話し合う場の違いを意識する→ SNS、チャット（非対面）、教室（対面）
- ・「打ち言葉」（文字、スタンプ）か「話し言葉」か（「打ち言葉」：情報機器などへの文字入力という言葉。SNSなどの私的場面における頻繁で短い言葉のやり取りでは、書き言葉であっても、くだけた話し言葉的文体が用いられる。）
- ・こんな例もかんがえてみよう
「いいね ♪」のリアクションを対面でどう表現するか。どのように理解して ♪ なのか？

① 対応例

○聞き手：相手の意見をきちんと聞いていること示す、意

見の違いを否定しない、尊重する

○話し手：どこまで相手に伝わっているか確認しながら話す、意見の違いを否定しない、尊重する

② 作品例

「一致団結コミュニケーション」
「己の欲するところを人に施すコミュニケーション」
「三人寄れば文殊の知恵なコミュニケーション」
「創意工夫するコミュニケーション」
「溫柔敦厚コミュニケーション」
「懸崖撤手コミュニケーション」
「剛毅果敢なコミュニケーション」

事例B 慣用的な表現の誤解、親しいが上下関係にある場合

・話し合う場→対面状況
・慣用句の意味、用法
「煮詰まる」は「議論や考えが出尽くして結論が出せる状態」なのか「行き詰まった状態」か？ →文化庁「言葉のQ & A」

① 対応例

○話し手・聞き手の双方が「煮詰まった」状態について言い換える、前後の状況を説明する・質問するなど
・聞き取り間違いなのか、解釈のずれなのか

② 作品例

「脚下照顧を意識したコミュニケーション」
「銘肌鏤骨コミュニケーション」
「相互理解コミュニケーション」
「遠慮会釈コミュニケーション」
「蒟蒻問答コミュニケーション」

事例C 相手に配慮して「大丈夫？」

・話し合う場→対面状況
・言葉が過不足なく伝わっているか
→「あいまい」「含みのある」言葉は、正しく「音」として聞こえたとしても文脈や周囲の状況、話し手・聞き手本人にしかわからない状況・事情でどのように受け止められるか
→「大丈夫」は、本来は「あぶなげがなく安心できるさま。強くてしっかりしているさま。」だが、解釈の幅がでている。

[補説] 近年、形容動詞の「大丈夫」を、必要または不要、可または不可、諾または否の意で相手に問いかける、あるいは答える用法が増えている。「重そうですね、持ちましょうか」「いえ、大丈夫です（不要の意）」、「試着したいのですが大丈夫ですか」「はい、大丈夫です（可能、または承諾の意）」など。

引用元：“だい - じょうぶ【大丈夫】”，デジタル大辞泉（小

学館），ジャパンナレッジ School, <https://school.japanknowledge.com>,（参照日：2022/5/16）

① 対応例 誤解はいつでも・どこでも・誰でも起こる→具体的な用件、意図を明確に

○話し手：「体調はいかがですか？ 具合が悪いのですか？」「手伝いましょうか？」など用件を明示し状態を尋ねる。

○聞き手：相手が自分に関心をもって接していることを理解する。その上で意図を確認する、こちらの状況を説明する。

② 作品例

「以心伝心コミュニケーション」
「意思疎通コミュニケーション」
「顔をうかがうコミュニケーション」
「和顔愛語なコミュニケーション」
「温厚篤実なコミュニケーション」
「善因善果なコミュニケーション」
「簡潔明瞭に伝えるコミュニケーション」
「的を射るコミュニケーション」
「好謀善談を意識するコミュニケーション」
「猿も木から落ちるコミュニケーション」

事例D 友達に「話が難しい」「話が飛ぶ」と指摘を受ける

・話し合う場→対面状況
・「話が難しい」…例：相手が初めて聞く内容を専門的な言葉で話す、読めばわかる言葉と聞いてわかる言葉、読んで理解できる量と聞いて即座に理解できる量の違い
・「話が飛ぶ」…例：急に話題が変わり前後の文脈がわかりにくい。自分が思いついたことを相手は予想できるとは限らない。

① 対応例 聞き手を「おきざり」にしない

○話し手：相手がわかる言葉に言い換えたり、説明したりする。話題の提示、前後の文脈の補足

○聞き手：どこまで理解できたのか、何がわからないのかを伝える。

② 作品例

「温和丁寧なコミュニケーション」
「釘を刺すコミュニケーション」
「人を見て法を説くコミュニケーション」
「魚心あれば水心コミュニケーション」
「知恵が回るコミュニケーション」
「相互交流コミュニケーション」

3 今後の課題

3.1 本単元を終えて

本単元の第3次のふりかえりとして次のような問いかけをした。「題を手がかりとして要約するときのコツ、注意した点を一文でまとめなさい。」以下は生徒の記述の抄出である。

- ・筆者が主に「身銭」について主張している部分を見つけ要約文を書く。
- ・題名に対する答えの部分を中心に、答えに繋がりそうな大事なことを残していく。
- ・「コミュニケーションが可能なレベルに戻る」「両者が理解するための一歩を踏み出す」「手間暇をかける」など同じ意味の表現が多かったので、文の中で意味が重複してしまわないよう注意した。
- ・題に含まれている本文中のキーワード「身銭」がどのような意味なのかをよく考える。
- ・慣用句の意味を理解して、コミュニケーションの場合、どういう意味になるかをわかりやすくまとめた。

題と主張の関係、慣用句の辞書上の意味と文脈上の意味の関係を捉えて要約に生かす意識が見られる。当初、キーワードを並べ、つないだものもあったが、第2次を経てなぜ「身銭を切る」のかその目的、理由を含むものへ修正できたものも多い。主体的に粘りよく学ぶ態度を養うためにも一回の提出で終わらせるのではなく、提出期間にゆとりを持たせたり、見直す視点に気づく場（生徒同士の共有や視点の転換など）を設定したりすると推敲する力も育成できると考える。

3.2 今後の課題

生徒自身が語句の理解、習得、活用の過程を経験的に積み重ねる単元構想と系統的な指導計画が今後の課題である。そのための課題を3点挙げてまとめとする。

1. 必修教科目間を結ぶ、選択科目へつなぐ見取り図として「系統表」を活用すること
2. 生徒が主体的に語彙を豊かにする指導や言語活動を模索すること
3. 言語活動を通して見える課題を集約し目指す生徒の姿の明確化、手立てに還元すること

特に高校生はそれぞれの生活様式や進路希望により語彙の質と量の個人差がさらに広がる時期だ。だからこそ、生徒自身が言葉を蓄積し、見返し、更新を継続するよう支援する必要がある。授業では読み手から理解を得るための語句の選択、話し手・書き手の意図を的確に捉える読解力など3領域で発揮できる力としてバランスよく育成することが大きな課題と

なる。生徒が主体的に語彙を豊かにできるよう引き続き指導方法や言語活動の在り方を模索したい³⁾。

謝 辞

本稿は日本国語教育学会主催「第85回国語教育全国大会」大学部会シンポジウム（2022年8月7日実施）における口頭発表に基づき作成しました。発表準備から当日の議論に至るまで、筑波大学人文社会系の島田康行教授、専修大学国際コミュニケーション学部山下直教授、信州大学教育学部の西一夫教授、神奈川県立多摩高等学校の石原徳子総括教諭に多くの御教示をいただきました。

また、本稿を成すにあたり、相山女学園大学教育学部の深谷和義教授に御指導いただきました。ここに記し、深く感謝いたします。

注

- 1) 石黒圭（2018）は、「理解語彙と使用語彙の違い」において次のように述べている（下線は筆者が付した）。

森岡健二氏（「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」『国立国語研究所年報二』、1951）に従い、義務教育が終わる中学終了時点の理解語彙を三万とし、使用語彙数をその五分の一の六千と仮定し、さらに、生まれてから最初の一年間は理解語彙数も使用語彙数も増えないと考えると、子どもが一日あたり獲得する平均理解語彙数は六語弱、平均使用語彙数は一語弱になります。単純計算では、子どもたちは毎日新しい語を六語覚え、一語使えるようになっていくわけです。

しかし、日常生活で使われる語彙は限られる一方、学習で学ぶ語彙は際限なく増えていきます。そのため、年齢が高くなればなるほど、憶える語彙は抽象的な語彙になり、個人差は開いていくという点には注意が必要だと思われます。（pp. 110-111）

- 2) 教科書の題は「『身銭』を切るコミュニケーション」であるが、初出は「身銭を切るコミュニケーション」（『文学』9(6)、2008年11月、12月号、岩波書店、pp. 62-63）である。主たる教材ではタイトルの段階で「身銭」にかぎかつこが強調のためつけられたと読める。が、初出では最後の段落で初めてかぎかつこ付きの「身銭」がでてくるのだ。

私がカウンターから身を乗り出し、言葉をひとことひとこと区切って発音したのは、その「身銭」であり、それにひとことひとこと区切って答えたのは、店員なりの「身銭」である。私は彼女のこの「手間暇」を多とするのである。

表2 語彙指導を通して目指す生徒の姿（例）

指導のアイデア（一例）	目指す生徒の姿（一例）
A 「語句の量を増す」ことに関連して ・理解語彙，使用語彙を増し，表現語彙として活用できる場面を設定する。 ・主体的に継続して語彙を増やす姿勢を養う。	・本文の記述に即して的確に理解できる。 ・話し手の伝えたい内容や狙いを表現の仕方や論理の展開に即して的確に理解できる。 ・対象や場，目的に応じて適切に表現できる。
B 「語感を磨き，語彙の質を高める」ことに関連して ・類比・対比の視点から言い換えや違いを，用例を挙げて検討 ・1つのテーマ，媒体で使用される語句を集め，語彙を分析 例：ノートに継続して記録（#2） ・目次，索引，辞書の形式で記述（例「違いが分かる辞典」） ・AI テキストマイニングで集めた語句を客観視する（#3） ・検索の場面で用意した検索語で得たい情報が反映されるか →語彙の構造の観点を踏まえて考える →ふりかえりで「検索履歴」を分析，共起語の理解と活用	・記述の批評，推敲の場面で「表現の仕方の工夫に気づく」，「ひっかかりを覚える」，「よりよい表現を考える」姿を目指したい。 ・連想を活用した課題の設定の場面で，言葉を介した柔軟な発想ができる（#4）。 （現状：ブレンストリーミングの際，次の語が浮かばない，書き出した語と語の間を説明できない，ラベルに用いる語がなかなか思いつかない等） →大切なのは「急いで答えを出すこと」ではなく，まずは「思いつかなかった」「言葉を探していた」「どう考えればいいのかわからなくなった」など状況を言語化できること。次に考えるために必要な語句，語彙を検討させるなど言葉で考える場を数多く経験させたい。

これは，最後の段落まで読み，振り返って題の真意に気づく仕掛けとも読める。見慣れた慣用句が新鮮な意味をもつ展開とも考えられる。このように題は作品全体を作品の先頭に当たる箇所であり，かぎかっこをつけるか否かで全体の印象も変わる場合もあるのだ。

あくまで目の前の本文に即して読み取ったことを理解の対象とする一方，読み比べの活動が増える中，本文そのものの吟味についても今後の課題としたい。

3) 語彙指導を通して目指す生徒の姿の例を表2にまとめた。

【表1・表2中の関連事項】

- #1 K・W・L チャートを活用した学習活動（知っていること，知りたいこと，学んだことを区別する視点）
 田中洋美（2016）「主体的・協働的に学ぶ言語活動の日常化を目指して—高1国語総合「新書を読もう・伝えよう」実践報告—」（『椋山女学園大学教育学部紀要』9, pp. 147–166）
- #2 「わたしの国語表現ノート」（自分のつけたい国語の力を設定し，年間20回の連載を目指す企画）
 田中洋美（2020）「主体的な学びを目指す家庭学習」（『教育科学国語教育』No. 852, pp. 68–71）
- #3 AI テキストマイニング，思考ツールを活用した言語活動（「秋の夕暮れ」のエッセイを書く活動）
 田中洋美（2022）「言語文化に学ぶ『他者意識』と『自己意識』」（『教育科学国語教育』No. 867, pp. 20–23）
- #4 「わかりやすさを疑う」
 渡部泰明・平野多恵・出口智之・田中洋美・仲島ひとみ（2021）『国語をめぐる冒険』（岩波ジュニア新書）

参考文献

- 浅田孝紀（2019）「高等学校の語彙指導における単元的発想—学習者を日常的にかつ探究的に語彙の学びへ向かわせるために—」（『月間国語教育研究』567, pp. 22–27）
- エリン・オリヴァー・キーン，山元隆春・吉田新一郎（訳）（2014）『理解するってどういうこと？—「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物—』新曜社
- 石黒圭（2016）『語彙力を鍛える 量と質を高めるトレーニング』光文社新書
- 石黒圭（2018）『豊かな語彙力を育てる』ココ出版
- 井上一郎（2001）『語彙力の発達とその育成—国語科学習基本語彙選定の視座から—』明治図書
- 甲斐雄一郎（2018）「言語生活の場でとらえる言語感覚」（『月間国語教育研究』550, pp. 4–9）
- 金子守（2018）「言語感覚を育てる単元学習」（『月間国語教育研究』550, pp. 2–3）
- 宮地裕・甲斐睦朗（2008）『「日本語学」特集テーマ別ファイル普及版語彙1』明治書院
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』東洋館出版社
- 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』東洋館出版社
- 鳴島甫（2018）「言語生活と語彙」（『月間国語教育研究』554, p. 1）
- 日本国語教育学会（監修）今村久二・中村和弘（企画編集・執筆）（2017）『シリーズ国語授業づくり 語彙言葉を広げる』東洋館出版社

- 西尾実（1961）『言語生活の探究—ことばの研究における対象と方法—』岩波書店
- 沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子（2011）『図解 日本の語彙』三省堂
- 大滝一登（編著）（2022）『高校国語新学習指導要領をふまえた授業づくり 評価編 観点別学習状況の評価を生かす』明治書院
- 大滝一登（2022）『高等学校新学習指導要領国語の授業づくり』明治図書
- 島田康行（2018）「高等学校における『語彙』指導のこれから」（『日本語学』37(11), pp. 34-41）
- 鈴木一史（2015）「国語教育における語彙指導」（前川喜久雄〔監修〕（2015）『講座日本語コーパス4 コーパスと国語教育』）
- 鈴木一史（2018）「語彙学習の二側面」（『月間国語教育研究』554, pp. 4-9）
- 鈴木一史（2019）「語句・語彙」（全国大学国語教育学会（編）（2019）『新たな時代の学びを創る中学校高等学校国語科教育研究』東洋館出版社）
- 鈴木一史（2019）『国語教師のための語彙指導入門』明治図書
- 田中牧郎（2018a）「日本語学は語彙教育にどう貢献できるか」（『日本語学』37(11), pp. 12-22）
- 田中牧郎（2018b）「言葉に関する指導事項について」（『日本語学』37(12), pp. 80-91）
- 田中牧郎（2019）「生きて働く知識・技能としての語彙—日本語学から提示できる語彙情報—」（『日本語学』38(9), pp. 20-30）
- 塚田泰彦・池上幸治（1998）『語彙指導の革新と実践的課題』明治図書
- 塚田泰彦（2001）『語彙力と読書—マッピングが生きる読みの世界—』東洋館出版社
- 塚田泰彦（2018）「新学習指導要領に提示された語彙力とは何か」（『日本語学』37(11), pp. 2-11）
- 山元隆春（2020）「国語科教育の目指すもの」（山元隆春・難波博孝・山元悦子・千々岩弘一（2020）『あたらしい国語科教育学の基礎』溪水社, pp. 3-15）
- 山下直（2019）「高等学校〔知識及び技能〕の指導の留意点」（『日本語学』38(5), pp. 148-155）
- 山下直（2020）「思考力を育て表現力を高める語彙の指導」（『月刊国語教育研究』580, pp. 2-3）